

／のは絹帛である。

(9) 先掲の諸論文参照。

(10) 註9に同じ。

(11) 宋史^{卷八}地理志・江南東路・廣德軍の條による。

(12) 前出「中國地名大辭典」による。

(13) 筆者は未だ寺院關係の史籍には殆んど目を通してゐないので、若しかうした方面を漁れば更に若干の史料が出るのではないかと
思ふ。續いて勉強するつもりである。

(14) 辭源による。

(15) 稻・稻子・穀・粟と米との關係に就いては別に專考の一篇を組
んでゐるので機を得て發表するつもりである。

(16) 營田の小作關係は別に專攻す可き大きな問題で、此所に簡単に
註することは困難である。

(17) 此の點は第一章の耕牛の集中に關する論述と相關聯して考ふ可
きである。

本稿は脇題に記して居る様に「宋代の貢・租牛と牛政」と題する論稿
の第三章に充當する構想の下に執筆したものである。目次に於いて括
弧を附して示してゐる如く第一章は貢牛、第二章は租牛とそれに續い

て本稿の長生牛が第三章となる豫定である。所で此の第一・二章は共
に未發表である。一・二章を差措いて三章を先に發表したのは紙數制
限に因り、他に意味があるわけではないが、それはともかくとして發
表の先後を顛倒してゐる爲め讀解に些か不便を來すこととなつた。勿
論、此の點を考慮して多少語句や説明を添加し筋を通しておいたつも
りで、文中に「先章」とか「先に」とかあつて本稿にそれに該當する部
分のないのは何れも未發表の一・二章中に出る豫定のものであること
を含まれて讀過せらるれば大體理解に支障を來すことはあるまいと信
じてゐる次第であるが、一言事情を述べて諸賢の御宥恕を乞うておく。

雜 錄

ベヒストゥン碑文の新調査

ダリウス王の功業を記したベヒストゥン楔形文字碑文は、從來の調
査が不完全であるところから、シカゴ Oriental Institute の George
G. Cameron 教授を團長として、Nicholson 大學其他の後援による新
調査が一九四八年中に行はれる。從來紹介されてゐる八行のほかに未
調査の四行を調査する。絶壁の中腹にあるこの碑文調査のために高層
建築用の吊り下げ足場を用ひる。(辻直四郎博士の御教示による。山
本達郎)